

京都秋期福音特別集会（2）

再宗教改革

――ガラテヤ書第3～6章――

1965年10月29日（京都）

小池辰雄

文化の根底は福音 福音の世界は完了形 言葉と行為 行法が聞信か 受言が直ちに受霊となる 無者無心の世界 天的必然こそ本当の自由 御言において御霊のキリストが入ってくる 「はい」、「よし」 霊言を受肉することを信という 聖霊の貫流・環流 共に十字架されている 私 キリストの体 キリストと同質にされてある 御霊の自由 愛への自由 信愛一如 聖霊の果

【ガラテヤ3】

「愚かなる戦^{かな}、ガラテヤ人よ、十字架につけられたまいしままなるイエス・キリスト、汝らの眼前に顕^めされたるに、誰^たが汝らを誑^{たぶら}かししぞ。2我は汝等より唯この事を聞かんと欲す。汝らが御霊を受けしは律法の行為に由るか、聴きて信じたるに由るか。……5然らば汝らに御霊を賜^{たま}いて汝らの中に能力ある業^{わざ}を行^ない給えるは、律法の行為に由るか、聴きて信ずるに由るか。6録^{しる}して『アブラハム神を信じ、その信仰を義とせられたり』とあるが如し。……14これアブラハムの受けたる祝福のイエス・キリストによりて異邦人におよび、且^{かつ}われらが信仰に由りて約束の御霊を受けん為なり。……25されど信仰の出来^{いで}りし後は、我等もはや守役^{もりやく}の下に居らず。26汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りて、みな神の子たり。27凡^おそバプテスマに由りてキリストに合^あいし汝らは、キリストを衣^きたるなり。28今はユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自主もなく、男も女もなし、汝らは皆キリスト・イエスに在りて一体なり。……

【ガラテヤ4】

……5これ律法の下にある者をあがない、我等をして子たることを得しめん為なり。6斯く汝ら神の子たる故に、神は御子の御霊を我らの心に遣して『アバ、父』と呼ばしめ給う。……19わが幼児^{おやな}よ、汝らの衷^{うち}にキリストの形成るまでは、我ふたたび産^うみの苦痛^{くるしみ}をなす。……

【ガラテヤ5】

「キリストは自由を得させん為に我らを釈^とき放ちたまえり。然れば堅く立ちて再び奴隷^{くびき}の軛^{つな}に繋がるな。……5我らは御霊により、信仰によりて希



望をいただき、義とせらるることを待てるなり。……

¹³ 兄弟よ、汝らの召されたるは自由を与えられん為なり。ただ其の自由を肉に従う機会となさず、¹⁴ 反って愛をもて互に事えよ。……²² 然れど御霊の果は愛・喜悅・平和、……

●文化の根底は福音

ガラテヤ書3章、

「愚かなる哉、ガラテヤ人よ、十字架につけられたまいしまなるイエス・

キリスト、汝らの眼前に顕されたるに、誰が汝らを誑かししぞ。

この言葉が或る先生によって観念的に受けとられて、私が攻撃された。脊椎カリエスで2時間も坐っているとまた寝なければならぬような青い顔をした女性があった。その人をお訪ねして、私が御言を読みながら祈ってあげました。そして、非常に深い呼吸が始まって――私は実に驚いた――何か少し毒気のような感じがしたので、私は窓を開けた。15分くらい悶えるような呼吸をした。それが終って坐ったら自然に、パウロが言っている異言が発しました。異言が止まらない。それで、そのうちに私は按手をして、平安の祈りで止めさせていただきました。その人は、

「先生、身心がすっかり軽くなりました。何か治ってしまったようだ」

と。ところが、私はその人の先生ではありませんから、その人の先生に詳しく報告をした。そうしたら、その先生はガラテヤ書のこの文句を引用して雑誌の上で、匿名ですが、攻撃した。私は攻撃された。即ち、何かご利益教かと思ったわけです。

「何びとにたぶらかされたか」

と、パウロのこの言葉を引用して書いてある。そして私に、

「先生からこう言われて困ってしまった」

と言う。私は、

「そうですか。もし聖書の真理によって論駁されて、それが真理ならば、私は取り

消すけれども。そうでない限りは、私は取り消すことはできない」

と答えた。ルターが、

「かくあらざるを得ない」

と言って、ローマンカトリックに対して「ナイン! (否)」と叫んだことから、大きな宗教が展開したわけです。そして、その結果は結局、私の御言、御霊の権威におされまして、その人は、

「本当にもう、私はこの恩恵の事態に従わなくてはならない」

と言った。私はもう一遍訪ねて行って、この御言を固うして来た。それから、その方は或る方面における有力な伝道者として――女の方ですけれども――立つておられるわけです。



私が育ったところの無教会においては――学者が学問の世界において、事業家が事業の世界において、医者が病人に対する世界において、何でありましょうとも、そういった事態において――限りなき展開を本当にしていくということが、さてどれくらい現れているか。私はだいぶ疑問だと思う。

この福音の世界に入ると、私は絶対に、

「文化の根底は福音である」

とはつきり言う。「宗教と文化」ではありません。本当の意味における宗教は、福音は絶対に文化の根底である。根つこの世界である。幹は倫理の世界です。枝や葉や花や実はもろもろの文化現象の世界です。法律をやる、経済をやる、理化学をやる、工学をやる、何をやったっていいですよ。その世界における法則、学問、技術は、大いに研究していい。けれども、その根底となつて一番それを動かしていくところの世界になつたら、これはもう絶対に福音の世界です。魂の霊性の世界、一番深い霊の世界です。これが本当に確立していなかったならば、どんなにその現象面や技術面は素晴らしくなつても――今、20世紀の文化はそうです。恐ろしいのは原子力兵器ではない。恐ろしいのは人間の心である――この心が本当に神の霊にふれて、そこから心している心でないならば、とんでもない心になつてしまう。心ほど恐ろしいものはない。

「人間の心ほど偽るものはない」

とエレミヤが言いました。

「人の心腸を見給う万軍のエホバよ」

とエレミヤが言っている。エレミヤは心の預言者ですけれども。この心の世界、魂の世界が、何をしようとも、人間の最初の問題であり最後の問題である。問題中の問題である。さきほど、だいぶ自我の問題も出てまいりましたが、その問題中の問題が、実にこの福音において既に解決しているんです。

●福音の世界は完了形

2章の終りでできつき学びました。

「われキリストと偕に十字架につけられたり」

というんですよ、皆さん。これから付けられるのではない。現在完了です。完了形なんです。福音の世界は完了形ですから。未来形ではない。讚美歌でも、「何々し給わん」なんて呑気な歌い方をしている。私はあそこを「し給う」と訳す。現在です。あるいは、「し給えり」という気持で歌う。これは完了、現在完了です。過去完了なんていうのは遠くの話だ。ヘブライ語というのは完了と未完了しかない。それが未来完了か、現在完了か、過去完了か分らない。そして、完了形ということは断定している姿です。

もう、贖いは終わってしまったていますよ。ヘブル書を見てください。9章に書いてある。



「然れどキリストは来^{きた}らんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬ此の世に属せぬ更に大なる更に高次なる、全き幕屋を経て、

完全なる幕屋を経て、

¹² 山羊と犢^{こうし}との血を用いず、己が血をもて只^{ただ}一たび至聖所に入りて、

即ち、十字架という、ゴルゴタという至聖所に入つて、

永遠^{あがな}の贖罪を終えたまえり。」(ヘブル9・11、12)

と書いてある。私たちの贖罪は既に完了であります。二千年前の過去完了は、これを受けとるときに現在完了として受けとる。自我との闘争は終わっているんですよ、皆さん。

「これから」

なんて思つてはダメですよ。もう、この自我なんていうやつは問題にならないんです。これをいつまでも問題にしてたら、百年、河清を待つがごとし。

私は、もしそうだったら、もう信仰は辞めるよ。それはとてもくたびれてしまうから。もう、皆さんの自我との闘争は、イエス・キリストが十字架上で完了してしまっているんです。これを受けとらないことが、本当は最大の罪なんです。いいですか。

だから、十字架は恵みであると同時に驚くべき審判であります。審判であると同時にまた恩恵である。私たちに對する、この自我に對する神さまの審判は、キリストの十字架で私を殺してしまつた。

「お前はダメだ。お前の罪は死にあたる」

と言う。だけれども、これを直接にやられたら、私はどうにもならん。地獄に落ちてお終いです。ところが、

「しかし、お前を地獄に落とさないで、お前を片づけてしまつた。それはここ(キリストの十字架)だよ」

と。もう、神さまは私の罪を見ない。過去の罪も、現在の罪も、将来の罪も見ない。この十字架を見て、私の罪はそつぽを見て、

「お前はなぜ、いつまでも自我なんてものを問題にするか。そんなものはもうここで片づいているではないか」

と。

「汝、在るが如く在れ」

というんです、むしろ福音の世界は。「汝は既に在る」という。私は在らしめられて在る。

「私は十字架で既に罪なき者と在らしめられて在る」

と。これは観念ではないですよ、事実なんです。

「罪なき者として在らしめて在る」

という、もの凄い罪なき存在、即ち「義人」であるんです、私は。皆さんも義人である。キリストの十字架の故に。「信仰によつて義とする」とは、



「義人となっている」

ということですよ。

「義人であるという事態を与えるぞ」

と。「義人である」という觀念を宣言しているような十字架ではない。義人であるという事態を与えているということは、一体どうして十字架がそうであるかというところ、それは十字架によって私たちを贖いとおとさしたところに、同時に靈的な生命がくるからですよ。

本当に「在らしめられて在る」という、「在る」という事態は聖靈の事態ですから。これはヘブライ語でも、「ハヤー」という字と、「ハツヤー」という字は似ている。「在る」という字が「ハヤー」という字で、「生きる」という字が「ハツヤー」という。「生命」も「在る」も似たような字ですよ。在り方がもう一つしつかりすると生命になってしまう(笑)。それは冗談ですけども、しかし、本当の意味において「在る」ということは、人間が在るとは、「生きる」他に在り方はない。

その「生きて在る」という生命とは即ち、キリストの復活の生命ですよ。でありますので、「既に汝は、もう自我は片づいている」

と。だから、自我との闘争は片づいているが、相変わらず片づいていない人もいるものだから、皆さんは、それで心配している。けれども、片づいている自我という、新しい第二の我というものが来ている。

「ひと新たに生まれずば」

という。

「すべて旧きものは過ぎ去った。視よ、新しく成りたるなり」

なんてね。その新成は、十字架とその復活の生命、聖靈によって既に新成されてあるんだ。

●言葉と行為

それだからもう、自我との戦いは必ず勝つ。どんなに今は、滑ったり転んだりしたって、もう戦いが戦いではない。そんなものは見るなと。

「戦おうと思ったら、もうそんな自分を見ないで、活けるキリストを見なさい。キ

リストの中に入っていくなさい。そうしたら、それに勝てるよ」

という、この本筋を忘れてはいかん。サタンを見たら、サタンに負けますよ。サタンと戦おうと思ったら、キリストを見れば、サタンは逃げて行ってしまう。

私なんかはちつともいわゆる靈的な人物でも何でもない。こんなお話をしたら、いいか悪いかしらんけれども、集会が終わる頃に或る人が

「痛い、痛い!」

と言いだした。

「どうしたんですか?」



「ある人が私を呪っています!」

と。呪いで藁人形に釘を刺すと、その時に悪霊が働いて、痛みが来るんだね。それで、私は分からんけれども、「主さま!」と言って、キリストに祈った。そうしたら、

「先生、だんだん抜けていきます」

と、痛みが抜けていった。そうすると、相手の方が今度はぶつ倒れた。呪っていたやつが、「あいつにかかっている霊は非常に強い霊だから、もうようそう」

ということ、呪うのをやめたという。私は何のことだか分からない。けれども、祈りが本ものであれば、主さまというのは本当に、私たちが弱いときに主はいくらでも強く働いてくださる。何も、皆さん、疑いも心配も要らんですよ。疑いと恐れは禁物であります。

「主われを愛す。われ弱くとも主は強ければ」

という讃美歌がある。あれは讃美歌の始めで終りです。そういう単純な信において勝っていきます。霊の世界にはいろんな霊がいますから。そんなものは本当は見えればいいんだけれども――ま、あまり見えても困りますけれども――見えなくなつて、一向心配ない。

問題は、主さまとの関係がそのように既に贖いは完了してあつて、もう私は完全に贖いとられてある。この中にはキリストの生命が来ているということです。

「私を受けなさい」

と。だから、絶対無条件に、

「はいっ」

と言う。「はい」と言えはいんですよ、皆さん。いちばん楽ですよ。『南無阿彌陀仏』や『南無妙法蓮華経』は少し長いけれども、私たちの「はい」でいいんだ。キリストに「はい」と言う。あるいは「主よ」でいい。「主よ」という一語が最高の最深の祈りですよ、皆さん。

「主よ、アーメン!」

と。こんないい祈りはありはしない。そういう単純な「主よ、アーメン」でもつて、この中に一切が含まれている。実に「然り、アーメン」という受け方でもつて行く。既に十字架の事実が私たちに宣言している最も激しい言葉ですから、人間を動かす。だから、私はいつも言っている。この言が浮いた言ではダメだと。行為こそ実は最も激しい言でもあります。

「始めに言あり」

というのではどうもいかんというわけで、ゲートル

「始めに行あり」

とあの『ファウスト』の中でやっていた。なかなか大胆に、さすがにゲートルですね。それはあまりにその当時のキリスト教がいわゆる言葉のキリスト教であるから、

「もつと心と行為のキリスト教にならなければダメだ」

と。いわゆるクリスチャンでないゲートルがそういうことを言う。



「神初めに光あれと言ひ給いければ光ありき」

ということとは、「光ありき」という行と即なんです。言は即、行であるから、行がくるというだけの話です。言が即、行なんです。だから、キリストは、言えば直ちに霊の生命が来ている。

「わが言は直ちに霊であり、生命である」

という。即ち、キリストの言自身がもう行為なんです。だから、キリストにおいては、キリストの言葉もキリストの奇蹟的な行為もみんな同じことです。それを言葉と言おうが、行為と言おうが同じことです。それほどズレのない事態が本当の生命の、本当の活ける現実の真理の事態です。そういった事態を、私たちは自分たちがやろうとしたら苦しくしてしまうが、既に完了している活ける事態を受けとるというのですから。さっき言った「はい」というのは、皆さん、ただ口だけで「はい」と言っているのではない。全存在で「はい」と言うんです。

●行法か聞信か

それで2章の終りはそういうわけで、はつきり申しあげておきます。これは完了しているということ。パウロは「生くるであろう」なんて言つてはしない。

「もう、私は生きている」と言う。

「ガラクタのまんまで生きてます。心の中を整えてから頂くのではありません」

と。ガラクタの中に光が入って、水のような火のような――水とも火とも言いますが――聖霊が入ってくると、中から整えられていく。浄化されていく。生命化されていく。内から変貌されていくという話です。

ご馳走が出ていて、このご馳走はどれだけの養分があつて何カロリーだなんていくら分かったつてどうにもならん、食べるまでは。食べて内側のお腹の中に入るから、活力が出てくるんですよ。

「この御馳走の成分が分かりました。私はもうたくさんです」

なんて、誰が言うか。なおさらお腹がすいてしまう。そういうお腹のすくような聖書の研究ばかりやっているから、しまいにくだびれてしまいますよね。

どうか、そういうことで、もう完了済みですから、完了済みで既に与えられた世界から進んで行く。与えられているものだから、私がつくったものではないから、皆さんがつくったものではないから、もうこれは必ず展開せざるを得ないじゃないですか。

私はたぶらかしたのでも何でもない。本当にキリストの十字架を受けとつて、生命を受けとつて、そして、

「その方のために、どうか、神さま、あなたの器として使ってください」



と。ただ御利益で祈ったのではない。そうしたらば、そうだった。そして今度は、
2 我は汝等より唯この事を聞かんと欲す。汝らが御霊を受けしは律法おきての行為おこない
に由るか、聴きて信じたるに由るか。
直訳すると、

「信を聞くことによるか」

と。「信の聞きによるか」「聞信によるか」というわけだ。「聞信」なんていう言葉は使わなくていいですよ。今ちよつと私は仮りに書くだけの話です。こんな言葉はないですよ。律法を行った行法か、聞信か、ということ。どうも、ちよつと見ると、行法の方がよさそうですね、法を行うというのは立派だから。信を聞いただけではどうにもならないと。ところが、福音の世界は聞信だと言う。この言葉が読めないです、御霊の光で読まないと。

「聞きて信じたる」

とある。聞くということは、何ですか。一体、何を聞くんですか。言葉を聞くのではないですか。

● 受言が直ちに受霊となる

「宣教」という。神の言をパウロや使徒たちが伝える。言を耳に入れる。耳がもはや肉の耳ではない。言を「信ずる」はむしろ受けとる、受言うけごんするわけだ。受言して、御霊を受けた。受言、言を受けるということと、受霊うけれいということ。御霊を受けたのは、言を受けとったことによつて霊を受けたという。受言が即ち受霊であるという。

皆さん、神の言は書かれた文字だから、それではこれを録音してから聞きましょうなんて、そんな二重なことは要らん。読めばいい。読めばいいけれども、読むことが、これは活ける言葉ですから、この言葉を受けとる。身体で受けとらなければダメですよ、身体で。言葉を身体で受けとれば、それが同時に御霊を受けとることになる。神の言葉は単なる言葉ではない。聖書の言葉は霊言であるから、これを本当に受けとれば、直ちに御霊を受けとることになる。

既に、御霊を受けとる場ができています。そこに十字架の驚くべき恩寵があるわけです。十字架でもう贖いとられてある。自分が始末がついてしまつて、もう問題がない。問題なき人ですよ、皆さんは。現実にはいくら問題があつても、もう根源的には問題がないんですよ。何がどうなつたつていいよという。いいですか。

「何がどうなつたつていいよ」

という、捨て鉢みたいな言葉だけれども、そういう事態が自分のはらわたの中にありうるのは、十字架があるからです。「私は何がどうなつたつていい」と本当に言える。それは十字架が私をして、何がどうなろうとも、絶対に行き詰まらないところの世界がこの十字架の場で来ているから。そうすれば、聖書の御言が直ちに、この受言が直ちに受霊となる場



がきている。聖書の言葉は霊なんだから。霊言なんだ。だから、言葉を受けとると直ちに御霊が来てしまう。御霊が宿っている言葉だ。御霊の宿っている言葉だから、キリストは、

「わが言は霊だよ、生命だよ」

と言っておられる。キリストが

「立て！」

と言えば、立つてしまう。

「潔まれ！」

と言えば、潔まつてしまう。キリストは驚くべきそういった方だから、直ちにそうなる。

キリストの奇蹟は、本当は奇蹟でも何でもありませんよ。みんな霊的な法則が働いているだけの話で、奇蹟なんてものはありはしない。みんな聖意みこころが法則として、聖意であり、また聖法である。法としてそれが展開している。我々にその法則の法則たるゆえんが分らないから、不思議だなと思うだけで、私がもし野蛮人だったら、テレビなんか見たら、

「何だ、これは？」

と、奇蹟だと思ってしまう。それと同じことで、非常に深い次元のことが我々には分からない。キリストが海の上を歩いたなんていうのは、大体信じませんよね。

「キリストだつて重さがあるはずだが、少し沈みはしないか」

なんて心配する。けれども、キリストはもう物理的法則を乗り越えた法則の世界に入っていますから、それが可能なわけです。

御言が直ちに、御言を聞いたことによつて、御霊を受けるといふ、こういうことが本当に受けとれたら――「本当に受けとれたら」といっても、簡単に受けとれるんだけども――いいわけです。普通の信仰の世界ではそこをいい加減に読んでいます。

「聞きて信じたるによつて、本当に御霊が来るのだろうか？」

とか。また、来てもないのに、

「もう、聞いて信じたから、私たちには聖霊がある」

と、今度は思いこんでいる。そんな思い込みも偽りだよ。思い込みも偽りだし、それがいい加減に読まれることも、どうにもならないことだ。それはキリストがいかに霊的な存在、霊的人格かということが本当に受けとられていないからです。だから、その言葉もその行為もみんな御霊の事態であるということはどうも、あまりにも明瞭なことなんです。

創世記から黙示録にいたるまで、聖書の次元というものは御霊の次元ですから。御霊の次元におけるところの現実が展開して、そして、異次元的なところにぶつかつて、そいつを救い上げようとしている。だから、キリストと他の人たちとの問答を見てもらなさい。

「お前は新しく生まれなければ、天国に入れない」

と言うのに対して、

「お母さんの胎から出てきたのに、なぜ、もう一遍入れますか」



なんてバカなことを言っている。あれはもう、キリストの言葉の現実が、霊的な現実が、霊の現実が読めないものだから、普通の肉の現実で答えるものだから、訳けがわからない。

「われは葡萄の樹、汝らは枝なり」

なんて言ったって、何のことだか分からない。

「普通の葡萄の樹とその枝の連なりよりも、『私が葡萄の樹でお前たちが枝である』
というこの現実の方がもっと現実だぞ」

ということがあの言葉の中に入っているんだけど、みんな読めないわけです。

●無者無心の世界

門が開かれている。門が開かれて、新しい現実の中に入る。その門は絶対に十字架であるということですよ。そして、十字架を通ると、新しい現実の世界は、復活の生命の、永遠の生命の、御霊の現実であります。御霊の現実です。十字架を通った世界は全部、御霊の現実ですから。

「十字架を通るって、これは大変だな」

なんて。何も大変ではない。キリストの方でちゃんと始末をつけていらつしやるんですから。無条件に「はい」と言って、この中に入ればいい。いいですか。

そうしたらば、一体何が起こってくるか。そこで展開してくるところのものは本当に自由なんです。解放なんです。ここに初めて、自由ということが言える。

「狭き門より入れ」

という。その先も狭いか。冗談じゃない。狭き道から入って、狭き門を通っていく。これ何も携えて行けない。十字架を通るときに、何か

「これだけの聖書知識がいるから、これだけの愛の行為がいるから」

とか、何もいらん。もうあるがままの素手でいい。何もいらん。

「ラクダが針の穴を通る方が、富める者が神の国に入るよりもやさしい」

という言葉があるでしょ。「富める者」とは何かというと、みんな自分でもって条件付けている者が「富める者」なんです。

「私はこれだけの学問がある。私はこれだけの健康がある。私はこれだけの社会的な地位がある」

と、なんのかんのと、それはみんな「富める者」です。そういう自己に付ける何かを持っている者はみなこれ「富める者」です。それは神の国には入れないよと。

「自分は無者である」

と。無き者。キリストは無者なんです。キリストは何もない。神の他に何もいらぬ男なんだ。始末のわるいひと。キリスト・イエスというこの始末のわるい方、

「私は何も言えない、何もできない」



と言いながら、もの凄いことを言ったり、もの凄いことをしたりしている。これは無者だからです。

剣道の世界でも、最後は無刀流というんですよ。最後は剣を持っても、その剣が見えない。刀を持つているが、その刀身が見えない世界が本当の無刀流の世界。それをもうひとつ行けば、刀はいらない。もう相手をただ見ていればいい。向こうは剣を持っていたって、そこはヒラリヒラリといく。どんなにしたって、牛若丸ではないが、弁慶が参ってしまった。ヒラリヒラリと跳んでしまう。

剣道の世界でも、芸術の世界でも、最後は技術ではない。技術に絶する。弓の世界でも、もはや的^{まと}と心と矢とはピタリ一つになって、もうそこが見えるか見えないかというような境地に入るときに、本当の弓が射得るわけでしょ。これはみんな、無者、無心の世界です。この無心の心というのは、「私心がない」ということですよ、この無心というのは。

そういう無者無心というようなところを実は、十字架が与えているんです。私は悟って無になったのではない。十字架がこの無者というものに私を、皆さんをしてくださった。もう自分なんかはどこかへすつ飛んでしまっている。戦いは済んでしまっている。だから、今度は楽に戦えるんです。

そういうようなところで、相手は神さまと微笑みながらやっているような世界だよな。どうして、キリスト教界が固いかというと、結局、この十字架の無を本当に受けとって、聖霊の自由^{かつた}な世界に入らないからです。そこが絶対に再宗教改革を要するところです。私がするのではない。皆さん一人ひとりが、あなた方の胸三寸の中で、全存在の中でその再宗教改革をやっていただけです。何も声を大きくして言う必要は何もない。

「傷める^{いた}韋^{あし}を折ることなく、ほの暗きともしびを消すことなし」

という。本当の世界で知らぬまになされていく。

●天的必然こそ本当の自由

今の人が「自由、自由」なんて言うが、あんなものは自由でも何でもない。本当の自由というものは、ルターが『キリスト者の自由』という有名な本の中で――これは宗教改革の非常に大事な本ですが――

「クリスチャンは、一切のものに超越したところの自主の者であつて、何びとも依存しない」

と言っている。絶対の自主である。ということとは、手放して自由と言うのではない。これは神・キリストにより賜りたる自由です。キリストによるところの、キリストに在るところの自由。

「キリストの中に在ってこそ本当の自由である」

ということとは、言い換えると、キリストの僕であるということです。キリストの僕である



ということが自由である。

イエス・キリストは、旧約聖書のイザヤ書の中に出て「エホバの僕」という姿を彼自身がとられた。僕となつて、絶対に神さまの言うとおりになつて、

「汝の御意を成させ給え。この私を通して、どうかやつてください」

と。「成させ給え」と言つて傍観しているのではない。提身しているんだ。

「どうか、お使いください」

と。神さまの意志の何か器のごとく、キリストは使われている。キリストは僕である。そのときに、相手は絶対者ですから、絶対者によつて動かされているということは、絶対的な自由を持っているということなんです。だから、必然こそ、天的必然こそ本当の自由である。

天的必然は、もうひとつやさしい言葉で言うと、「せざるを得ない」という言葉です。ルターが、

「われかくせざるを得ず」

と言つた。「こうしようか、ああしようか」と言つて、選択しているのは道德の世界だよな。

「すべし、すべからず」

なんて。そして大体、自分の力が嫌になつてしまったから、

「これもあれもダメだ」

なんて言つて、絶望してしまう。だけれども、

「あれか、これか」

と言つて選択しているのではなくて、「ざるを得ない」という、

「かくせざるを得ない」

というのが天的必然の世界です。それが本当に自由。そして本当に力があるんです。そこでなければ、力はこない。本当の力は、止むにやまれずして押し出していくところにある。

西郷南洲がこの言葉が好きだった。『言志録』(佐藤一斎 1772～1859)の中に、

「雷は止むにやまにやまずして鳴るではないか。雨は止むにやまれずして降るではないか。霧は止むにやまれずして吹いているではないか。これを至誠という。人間の心もそのようにして動かなくてはいかん」

と。止むやまれずして動くようなのが、「至誠」という。何か力んで、「真実」なんていつているのではない。

そういうような、天衣無縫的な世界です。自然法則が止むにやまれずして動いている。霊界の法則が、霊的法則が止むにやまれずして動いていく。私たちは、自然法則ではなくて、霊的法則における「止むにやまれず」ということ。「ねばならない」という世界がまんなかにあつて、霊的必然と物理的必然があつて、この霊的必然の世界、天的必然の世界が自由です。この自由は、十字架によつて突破されている皆さんも必ずこの世界に入る。どんなにそ



れが、私たちのいわゆる現実において、まだ何%であろうと、そんなことは心配いりません。私はマイナス99だって、この天的必然の1%が必ずこのマイナス99をやっつけていくから。私は救いが確かであることを確信しているんです。

「私の信仰が確かだから救いが確かだ」

なんてことを言っているのではない。

イエス・キリストの十字架を通して賜りたるこの御霊の生命は、「聞きて受けとり」たるところの、受言して受霊したるところの――言の中には霊が入っているんだから――その事態だから、キリストは私に、

「われ汝を既に贖いたり。汝の罪、既に赦されたり」

と、みんなキリストが実力をもつて仰っている。

「父の全きが如く全かれ」

と言ったって、キリストは実力をもつて、

「私は全くしてやるぞ」

と言う。この聖霊という芥種一粒は完全なるものですよ。完全性が来ているんです。完全性が来ているから、現実の私はどんなに不完全であつても、必ずこれが終いに満月になる。満月に円現することを私は信じて、人生はなんと豊かなる希望満々たることかなと。希望は既に現実になっている。

どんなにダメな集会であつても、この集会の中にはこの聖霊の生命が、キリストの身体として既にあなたの方の中に形成されつつある。だから、それを受けとっているかぎり、絶対にあなた方は滅びない。もし、これを受けそこなったら、どんなにそれが整って良さそうにみえても、ダメになる。はつきりしている。ダメになるかならないかは、この第一義的な存在によって決まるだけの話です。

そういうわけで、本当にその世界が、必然の世界が自由ということ。ああ、解放された。もう、私も皆さんも自我から解放されて、問題なき人であります。あと、問題なんか、そんなものは神さまによつて自然にそれを克服していくことができます。キリストの側から生命が来ます。

それで今度は、もう一つのことを言わなくてはならない。

「キリスト者は、一切のものに奉仕するところの僕であつて、すべての人に仕える」

と、まるで反対のことを言っている。自主なる者が、今度は奴隷みたいに仕えるという。僕である。一切の人に奉仕するという。これはまるで、外側からは矛盾しているようだが、これが矛盾しないのは、如何にして矛盾しないか。その事態はどういうことであるか。ガラテヤ書がちゃんとそのことを言ってますから、だんだんいきましよう。



●御言において御霊のキリストが入ってくる

5 然らば汝らに御霊を賜^{たま}いて汝らの中に能力^{ちから}ある業^{わざ}を行い給えるは、律法^{おきて}の行為^{おこない}に由るか、聴きて信するに由るか。

ここでもパウロは言っている。能力ある業を行い給えるは、律法の行為を訓練してやったのか、それとも聴きて信じたるによったかと。皆さんの日常生活で、いろんなことをなさいますね、そこにおいて力ある業がなされていく。パウロはこの場合、「力ある業」というのは、霊的な賜物^{たまもの}におけることを言っていますようにけれども、しかし、

「我々の日常生活において本当に力ある生き方ができるのは、それは律法の修練によるか。そうじゃないぞ。聴きて信じたるによる」と。

「御霊を賜いて、聴きて信する」

ということとは、この受言^{うけごん}ということがいかに深い言葉であるかということに気がつかなくてはいいかん。これは今、普通のキリスト教会で、聖書の研究をしているけれども、ちつとも受言になっていない。理解、釈義で――聖書釈義だとか、聖書の理解だとかで――受言になっていない。

「私を食らいなさい、私を飲みなさい」

とキリストが言われた。ロゴスの受肉体であるところのキリストを食らい飲めという。言葉を受けとることによつて、もう一つ言い換えると、キリストを受けとらなければダメなんです。言葉を受けとることが直ちにキリストを受けとることである。聖書の御言を受けて、それが何か

「ああ、少し何とか分かった」

なんてのではダメなんだ。その御言においてキリストが入ってくるんです。「キリストが入ってくる」とは何ですか。受言^{うけごん}ではないですか。御霊のキリストが入ってくることが即ち、受言である。受言においてこの活けるキリストが私たちの中に入ってきますから、これは生命ならざるを得ない。光ならざるを得ない。

「私はこんなことはできません」

なんて、絶対にそんなことはないですよ、皆さん。どんな不思議なことが皆さんを通して起きるか知らんですよ。

「汝ら是我よりも大いなる業^{わざ}をなさん」

とキリストは言われた。

「私がお前たちの中に入って、更に世の末に至るまで、地の極^{はて}に至るまで、大いなる業を進めて行くぞ」

と言うんです。イエス・キリストは具体的にこの私たち土の器を通して働こうとなさっている。ただ高いところから高遠なる教えを聖書を通してやっているのではない。我々この



破れ器をとおして、キリストは実際働きたもう。

だから、この「言」というのはいわゆる普通の概念の言葉でないですから。即ち、

「初めに言あり」^{ことは}

というこの「言」というのがヨハネ伝でちゃんとキリストを指しているように。また、

「これは世の光である」

というように、もの凄い生命を与えるところの光である。

●「はい」、「よし」

そういうわけで、パウロは、

「能力ある業を行い給えるは、実に言葉を受けとったからではないか」

という。

⁶録して『アブラハム神を信じ、その信仰を義とせられたり』とあるが如し。

アブラハムは神さまを受けとりました。神さまがアブラハムに、

「ちよつと外に出てごらん。お前の子孫はこの空の星のようになるよ」

と言われた。もう百歳にもなるアブラハムに子どもが生まれつこないですよ、普通の常識だと。けれども、神さまのその言葉を受けとりましたから、神さまはこれをもつて彼の義としました。「義とした」とは彼を義としたということ。神さまを「信じた」という言葉はヘブライ語では、

「アーメンと言った」

という言葉です。神さまにアーメンと言いました。

「そうですか、私には分かりませんが、アーメンですよ」

と。神さまに「はい」と言う。「アーメン」とは日本語でいったら、「はい」です。

「はい」

と答えましたら、神さまは、

「よし」

と言いましたと。これはもう少し簡単に訳したらいいね。あまり「義だ」なんていうから何か難しいことになる。

「神さまに『アーメン』と言ったら、神さまは『よし』と言いました」

ということですよ。神さまはこれを「よし」とした。

「よろしい、そうだ」

と。「はい」と答えたら、「そうだ」と言う。実に愉快です。そういう世界が本当の世界です。だから、死に至るまで童心であれという。誰かが私のことを少年のようだと言ったけれども、私の中には福音によって童心が生きている。外なる人は崩れていく。私はもう両方歯がないんですよ、これはみんな総入れ歯ですからね（笑）。それは歯医者がうまいものだ



から、ちょっと分からないけれども。そういうように私は、外なる人は破れている。けれども、

「内なる人は日々に新たなり」

というのは、そのようなキリストの生命が来て、これはどうにもならん。そういう始末ですよね。

アブラハムは「はい」と言いましたらば、「よし」とされた。「はい」、「よし」と。もうこれだけです。

●霊言を受肉することを信という

これが、キリストはそういう人だったから、「われ汝を喜ぶ」ときた。

「汝はわが愛しむ子なり。私はお前を愛するぞ。私はお前がうれしくてしようがない」

と。あの洗礼のヨハネに洗礼を受けたときに、ヨルダン川にとつぷり浸かって上がってきたら、聖霊が鴿のごとく彼の上に臨んで、そしてみ声がきて、

「われ汝を喜ぶ」

と。これは、キリストは悔改めの必要はないんだけど、もうただ神さまの前に平伏して、

「ただあなただけです。私ではありません」

と言ったのが、キリストの悔改めなんです。「あなただけです」と。

我々は、「悔改め」なんて言ったって、悔改めなんかできませんよ。我々はいくら悔改めたって、またものもくあみですわ。悔改めというのは「転向」という字で、方向転換するんだけど、いくら方向転換しても、またダメになるよね。もし、私たちの悔改めに、いつも

「悔改めて、悔改めて」

なんてやってたら、もう始まりませんよ。それよりも、上からくるところの磁力みたいに――十字架でもうすつ飛ばされた。そうすると、上から聖霊の生命が来たでしょ――そうすると、これはもう磁性をおびている。磁石みたいに。磁性を帯びさせてくださって、天界にあるキリストを、天極を――これは北極でなくて天極です――天極を指しているんです。どんなにこれがいろんなことで、すったもんだで揺れても、磁石は必ず北極を指すように、天極を指す。天極を指した磁性をおびた存在がこの聖霊の人なんです。聖霊の人はもう磁性をおびた存在で、磁鉄みたいなんだ。

それで、いつも、「主さまー」と言うのが祈りですから。祈りの世界で、即ち対話の世界で、魂をヒマワリのように太陽の方に向けていけば、いよいよ磁性をおびさせられる。いよいよ向けさせられる。こういうわけですよ。

これが、「受けとる」という、「信仰」というなら信仰です。ま、信仰という言葉が躓きに



なるから、あまり私は使いたくないんだ、この信仰というやつはね。もうなにか、信仰という言葉が十字架に掛かってしまっているんだ。だから、もし「信」という言葉を使いたければ、「信受」です。

「信」というのは素晴らしい言葉なんです。これはキリストの言が化体している。キリストの言が人となっている。言が、霊言が私の人となっている。これを信という。信仰とは神の言を受肉することなんです。御言を、霊言を受肉することを信という。御言は全部、これはキリストを証言している言葉ですから。キリストを証言して、またキリストをそこに顕し、キリストをそこに与えようとしている言葉ですから。ただ説明している言葉ではない。

●聖霊の貫流・環流

普通は、ガラテヤ書においてパウロは

「信仰のみ」

ということを言ったというような結論になってしまっているけれども、そうじゃないです。もちろん、「信仰のみ」なんだが、その信仰がいかに御霊の事態と切っても切ることができないか。それは14節を見ますと、

14 ¹⁴これアブラハムの受けたる祝福のイエス・キリストによりて異邦人にお

よび、^{かつ}且われらが信仰に由りて約束の御霊を受けん為なり。

とある。キリストは何のために来たか。私たちに約束の御霊を与えようとしていらつしやった。それでなければ、キリストの救いは完成しないわけです。だから、

「私は今にお前たちの中に入ってくる」

と言って、入ってきてから初めてキリスト教の歴史は始まった。今は、聖霊の時代なんです。私は自分の集会のことを「幕屋」というようなことを言っている。知らない方がもしおありだったら、ちよつと説明しておきますが。曠愛新書の第2号(『桑の木によちのぼる』、第3号(『砂漠はサフランの如く』)に詳しく書いてありますから、お読みください。三角形の頂点a、b、cが、皆さんの実存共同体、教会、エクレシア、集会を形成しているところの複数の最小限の

「二三人わが名によりて」

という構成員です。そして、その三角形の底面のまん中に神(G)とキリスト(X)の大黒柱GXが立っている。そして、この(三角垂体の)空間には聖霊が満ちている。そういった構造です。キリストは私たちと同じ次元に立っていてくださる。「友」と言って、私たちと同じ次元に立っている。上から臨んでいるんだ。神さまと居るけれども、聖霊のキリストは低く私たちの中へ入って、そして、この大黒柱となっている。上から、神・キリストの大黒柱の焦点から、神の光、生命、愛が流れてくる。これはみんな聖霊ですよ。聖霊の質



はそういうものですから。そうしたらば、このaを通って——ここで止まってやしない——これは必ず縦から横に流れていく。横に流れて、お互いに流れていく。だから、a、b、cは——どんなにお互いに握手したってそれはダメですよ、ところが——聖霊が上から貫き流れてくるでしょ、貫流すれば、今度は環^わとなつて環流する。

漢字というのはおもしろい。上から貫流してくると、今度はお互いに環流するわけです。環となつてグルグル環流する。そして、円現する。環となつてくる。環はまた和に通ずる。だから、本当の平和とか、和というものは、この垂直の線を一人びとりが受けとつてこそ、本当の平和であり、和であり、喜びの世界が展開する。我々の社会の関係も、国際関係もみんなこれでなければならぬわけです。本当の人間性というものは、上からくるところのこの霊的な生命、愛による。

●共に十字架されている私

そのことはもう結論的なことになつてしまふわけです。そのことは3章の終りの方に出ている。

²⁵されど信仰の出来^{いできた}りし後は、我等もはや守役^{もりやく}の下に居らず。²⁶汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りて、みな神の子たり。

これは或いは、

「キリスト・イエスに在るところの信により」

なんです。こう訳したつていい。キリスト・イエスの中に在るところの、そういった受けとつてゐる事態によつて、みな神の子である。「中に」と言うかぎりは絶対に聖霊がなければ、「中に」なんて言つたつて、それは観念です。思い込みですよ。

「何か知らんけれども、私もどうもこの聖霊の世界に、このように集会してゐるうちに入つたようです」

と。いいですよ、それで。「聖霊とはどんなのですか」なんて、出すわけにいかん。それは、申し上げてゐるとおり、これ（十字架）でもう解決済みで、自我（罪）がすつ飛んで行つてしまつたから、そこに、

「ああ、主さまー！」

と言つたらば、この祈りでもつて、聖霊は受けとられるんですから。祈りというものは、始めはそれは辛いこともあるでしょう。

「神さま、どうも祈れません」

と、何と言つたつていいですよ、祈れないときは、そう言つたつて。そうしてやつてゐるうちに、その中に入つてしまつて、もう神讚美にならざるをえない。詩篇を見てもらふなさい。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給ひし」



なんてやって——あれは十字架上の言葉だけれども、詩篇22篇の一句です——苦しんでいる。それから、22篇の終りになると、讚美になっている。

みんな、こちら側のお願いでいいから、とにかく正直にぶちまける。そうすると、上からの本願というのが、キリストの、神さまの御意というのが受けとられてくると、みんなこれに圧倒されて、自分の願いがもし間違っていたら、そんなものは棄ててしまう。そしてまた、変質されていく。変質されて逆なものになって、そしてみんなこれが祈っているうちに満たされてしまうから、讚美となっていく。そしてそれが本当の出発点となつて、今度はそれが行為に発していく。祈りは祈りのための祈りではない。実存に展開するためのものです。だから、

「キリストに在る信仰によつてみな神の子である」

という。

27凡そバプテスマに由りてキリストに合ひし汝らは、キリストを衣^きたるなり。

「キリストへのバプテスマを通して」

ということ。バプテスマとは何かというと、聖霊のバプテスマです。水のバプテスマだけではダメですよ。洗礼のヨハネは、悔改めのバプテスマとして水でやったけれども、

「私のあとから来る人は、御霊をもつてバプテスマする人である」

とはつきり言っている。御霊をもつてするところのバプテスマ、受^う霊^{れい}です。「洗礼」の礼の字は本当は霊だよ。洗^{せん}霊^{れい}という。本当のキリストの御霊をもつて洗^{せん}つてしまわなければダメです。洗礼は受^う霊^{れい}である。

十字架を受けとれば必ず御霊のバプテスマはくるんです。それでなければ、本当に十字架を受けとっていない。十字架を受けとっていることは、もう一つ申し上げますと、

「あそこに十字架されている私を見る」

ということですよ。

「自分は十字架されるというのはなかなか辛そうだけれども」

なんて、ちつとも辛くはない。あそこにもう十字架されている自分を見たら、知らないまにその中に入つてしまつている。そうですよ。

それは、本当にそのときに、皆さんの経験の中で本当にそれを受けとつてごらん下さい。もうそれは涙とも何ともいえないことになる。そして、そこにキリストの砕^{くだ}けを——キリストの砕^{くだ}けですよ——キリストの砕^{くだ}けを受けとるときに、本当にそれは砕^{くだ}けの心になる。十字架のキリストの砕^{くだ}けをいただいて初めて砕^{くだ}かれるのであつて、我々の心が砕^{くだ}けて、ただくではありません。

●キリストの体

28今はユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隸も自主もなく、男も女もなし、汝



らは皆キリスト・イエスに在りて一体なり。

もはや、この世のいろんな差別相なんてものは、

「差別相はあるけれども、なし」

と、パウロは言っている。

「差別相はあれども、なしに等しい」

ということなんです。それは自主も奴隷もあつたでしょう。その頃はまだ奴隷制度があつたから、そんなことを書いてある。決して、パウロは奴隷制度はいいなんて言っているわけではないけれども。いろいろな、男も女も、老いたるも若きも、学問があるもないも、そんなものは問題じゃない。みな本当に「イエス・キリストを着る」ということにおいて一体となる。これがキリストの体である。

我々は孤ではない。一つの体をなしている。一人びとりはのつぴきならない役割を果たしているところの細胞のごときものです。パウロは人体に例えています。みな役割がちがう。性質がちがう。務めがちがう。みなどれでもいい。どれがどうでなくてはいかんということはない。人間の存在というものを比較してはダメですよ。人格の比較研究はいかん。いわんや霊的人格というものは絶対に比較はできない。皆さんは、みな神における天下一品なんだから。神における天下一品を皆さんは自覚して、そしてお互いに「そうだ」と言つて、それぞれの使命を本当に尊重しながら行く。そういうようなことは、いくら道徳の世界で来いと言つたつてどうにもなりません、この聖霊の世界で本当にそのことが受けとれるまでは。

日本の社会の問題、またいろんな職業の問題、こういうことがいつまでたつても本当の解決にこないのは、この福音的構造が受けとられていないからです。ヨーロッパでは、もちろん相対的な意味だけでも、とにかく――私は『旅に想う』(曠愛新書第4号)にも書いておきましたが――自分がどれだけの才能があるか、自分はどういう性質を受けとっているか、これは学校や教会や両親との相談や自分のいろいろな経験や何かでもつて、大体見当付けている。そして、その人が一番――適材適所というが――適したものに安んじて行つて、そして、社会的地位とか何とか、そんなことは問題でない。本当に、やることにおいて楽しみをもつてやるという、そういう角度を持っている。さすがに、ヨーロッパではキリスト教の伝統を、宗教改革の伝統をもつた国だけあつて、そういう落ち着きはたくさんありますよ。

そこが、日本に比べると、もう幼稚園に入れるときから、

「どこの幼稚園がいいか? 優秀学校は?」

だとか。それから、大学なんていうと、何でもかんでも東京に来てみたり。ダメですよ、これは。みんな、それぞれのところにおいて特色をもつて在るという、健全な在り方にならなくては。それは結局、どこがそうかという、この福音の構造からきている。だから、



日本の将来は大変だよ。けれども、仕方がない。この福音の真理は宣明していく。それでも、私みたいなやつが学校にいるのも、そういったことを証していくためにいる。私は今度、宗教改革の翌日の11月1日にD大学で「人生と宗教」のことを話せというから、大いに語ってやろうと思っているんだけど。

どうか、皆さんが福音を受けとっていることは、それぞれ本当に重大な使命を負っていますから。「重大な使命」というのは何も、大きなことをやれということではないので、それぞれの在り方において、小さく見えるような事態を通して神さまは大きな神の国の建設をしていらつしやる。どうか、そういうことに安んじて、

「このわが隠れたる存在によつてこの日本は実は支えられている」

というくらいのこと——事柄はどんなに隠れたことであっても、その自覚たるや本当に日本を支えているくらいのこと——自覚をもつてよろしい。それぞれ一人ひとりが神の国の一員であります。

本当にキリストにあつて一つであるということは、今言つた幕屋構造でも、これが環流して一つである。では、それは一体、何が環流してくるのか。

●キリストと同質にされてある

4章5節に、

⁵これ律法の下にある者をあがない、我等をして子たることを得しめん為なり。

⁶斯く汝ら神の子たる故に、神は御子の御霊を我らの心に遣して『アバ、父』

と呼ばしめ給う。

と書いてある。律法の下にある者をすっかり贖いとしてしまつて、「すべし、すべからず」の世界はもう越えてしまつた。我等をして子たることを得しめんと。聖霊を受けとった人はもう神の子なんです。そして、神の御意を行うということにおいては僕なんです。御意を行ずるという役割においては僕であり、質においては神と同質であるところの子なんです。同質ですよ、これは。我々は御霊を受ければもう同質なんです。贖われたる者ですから、

「ついにキリストの姿に化するなり」

と云うじゃないですか。皆さんは、本当に神の子と既になっている。だから、

「父よ、お父さん！」

と、恐れなく父によりすが。また、呼ぶ。それはいよいよ質は同質になるから、「父よ」と呼べる。継子^{まこ}ではない。これは霊子^{れいし}なんだから。私たち一人ひとりはその御霊の、キリストが神の子であると同じように——「キリストが神の子」というのはひとつの特別な意味をもちろん持っていますけれども——我々もまた神の子である。贖^{あがな}われたる神の子である。いいですか。「贖^{あがな}われたる」ということを外してしまつて、何か自然に神の子になつたような気になつたら、とんでもない話ですよ。



それで、質が一緒になってしまったという、一体この「質」とは何か。パウロは、「せつかくそういう福音が来たのに、お前たちがまだ『すべし、すべからず』なんてやってるから、困ったものだ」

と言っている。パウロがガラテヤ書4章19節で、

19 わが幼^{おきな}兒よ、汝^{うち}らの衷^{うち}にキリストの形成るまでは、我^{うみ}ふたたび産^{くるしみ}の苦痛をなす。

と。この「わが幼兒よ」というのは、パウロはここでただ一回使っているだけなんです。いかにパウロがこのガラテヤの諸教会の人たちを惜しんで、また親しんで、「わがおきなごらよ」と呼んでいるか。そして、

「汝^{うち}らのうちにキリストの形成るまでは、私はふたたび産みの苦痛をする」

という。せつかく福音を説いたのに、聴きて本当に受けとらないから、もう一遍本当にキリストの形が成るまでは――「種(スペルマ)」という言い方をすることもあります。――そのキリストの霊核が本当にそこに形成されて、その似姿が成るまではと。

キリストは「神の似姿」という。今度は、私たちはキリストの似姿になる。「似姿」の「似」の字がヘタすると、ちよつと誤解されて困りますが。「ホモイ」ではなくて「ホモウシオス」です。同じ、同質の――「似た」ではなくて、同質なんです――同質なところの人間。アタナシウスがアリウスとの論戦において、

「キリストは神に似た人物である」

という説に対して、

「否^{いな}、キリストは神さまと同質である」

と言って戦ったという有名な歴史があるわけです。アタナシウスはその当時の全世界のそういったキリスト教的思想に対して、「否」と言った。これはアタナシウスの大事な戦いでありましたが、キリストは神と同質で、私たちも罪びとでありながら、キリストと同質にされてある。これは恩寵によつてされたのであつて、我々の努力によつたのではない。十字架ですつ飛ばされて、御霊が来たから、我々は同質である。

「皆さんは既に同質であるから、いよいよ同質になれよ」

ということ。「ザイン」(在る)の世界が「ヴェルデン」(成る)の世界に展開していく。

「既にそうで在るから、いよいよそう成れ。成らしてやるぞ。必ず成るよ」

というんです。いいですね。こんな嬉しいことはないじゃないですか。どうか、そういうことで、ひとつやってくださいよ。大事なことなんですからね、これは。

●御霊の自由

5章に行きます。

「キリストは自由を得させん為に我らを釈^とき放ちたまえり。然れば堅く立



ちて再び奴隷の軛くびきに繋つながるな。

「奴隷の軛に繋がるな」

ということとは、

「律法の奴隷となるな」

ということ。もう自由なんだから、みんな羽が生えている鳥みたいなものです。

私は人間でなければ、鳥になりたいな。自由自在に飛びあるく。そういった聖霊の翼でもつて自由に闊歩かつぱされるようなことになる。このキリストに同質とされた恩寵は、あなた方はこれを何と一体代えることができますか。全然ありませんよ、世の中にこれと代えるものは。

⁵我らは御霊により、信仰によりて希望をいただき、義とせらるることを待てるなり。

「御霊により」ということと「信仰により」ということが同意語に使ってある。「御霊により」ということはまた逆にいうと、

「恩恵により、信仰により」

という言葉になる。パウロがどう使おうが、みんな連関している言葉です。有機体的有機体的ですから。組織ではない。有機体的な構造です。あの「組織神学」なんていう言葉は私はあまり好きではないんだ、「ジステマーティシエ・テオロギー」なんて。むしろ、「オルガーニツシエ・テオロギー」と言いたい。もし「神学」というなら、有機体的な神学です。

我らは御霊により、信仰によつて、受けとったことによつて、信受信受によつて、本当に希望をいただき、義とせられることを待っている。この場合の「義とせられる」というのは、本当に義が完成されることを言うわけです。本当に自分が完成された義人となることを言うので、恩寵による

「信仰によつて義とされる」

というのと、この場合は違うわけです。あるいは、ここのところは、訳し方によつては、

「義とされる希望を待っているんだ」

というように言ってもいい。

それで、見ていくと、いかにパウロがガラテヤ書で御霊のことを言っているかということに気がつく。そして、13節、

¹³兄弟よ、汝らの召されたるは自由を与えられん為なり。ただ其の自由を肉に従う機会おきとなさず、反かえつて愛をもて互つかに事えよ。

と。さあ、この「自由」という言葉がおもしろい。ドイツ語でも語源的にいつて、「フライ」(自由)という字が「リーベン」「愛する」という言葉と同根なんです。ドイツ語においては、「自由」ということが、「愛する」ということと語源的に同義的なものをもっていることはちよつと偶然のようで、おもしろい。



●愛への自由

その自由は一体何のための自由かというと、そこでパウロが言っているように、

「互いに愛するためである」

と。それは「ため」でも何でもない。自由がもっている本質なんです、愛ということ。さつき言いましたように、神の霊、キリストの霊が入ってきますと、これは生命いのちであるし、生命というものは、生命の質は絶対に愛なんです。「永遠の生命」というのは時間的に永遠でない。この生命が本当に愛であるときに、それが本当の生命なんです。そうでない生命は本当の生命ではない。そうでないような生命はどんなに生命力があるように見えても、そんな生命は滅びますよ。愛を与えていくところのもの、そういった生命こそが、これが永遠の生命である。キリストの生命がなぜ永遠であるか。

「生命の水が流れて、湧き出でるぞ」

とキリストが言われた、その「生命の水」と言われている聖霊は――人の渇きを潤すところの水といい、また冷たいものを本当に暖める火といい、これはみんな、火と言おうが、水と言おうが――生命を与えるところの愛なんです。

ですから、解放されて本当に自由になったということは、御霊があるから自由なのであって、御霊のないところには本当の自由はない。そうすると、御霊が愛でありますから、自由は当然、愛と同義語的になってくる。本当の自由は愛ならざるを得ない。愛ならざるものは本当の自由ではない。愛だけが本当に無礙むげに、何ものも妨げなしに展開していくものである。本当の愛は敵をも愛する愛である。

パウロがローマ書12章で、

「自分を迫害する者のために祈れ」

と言った。どのようなことがありまして――人間だからときには癪しゃくにさわりますよね、それから、

「なんだ、しょうがねえな」

なんて思うことだつてあるよ――そういったような感情の奥に、聖霊のあるところには必ずそのもうひとつ奥から、ちゃんと包んでしまうところの――相手が逆らっていれば、それは包んでしまうけれども本当の赦しにはならない。それでも、どんなに相手が逆らっても――なおそれを赦すことができるところの驚くべきものが、このキリストの愛です。キリストの愛は、これを妨げる一切のものはない。ただ聖霊に逆らう者だけは、これに對しては戦いますけれども、その戦いは愛の戦いであるので、

「どうか、そのサタンの勢力から彼らを救ってやりたい」

という本当の悲願が、本願があるわけです。だから、愛を妨げるものは、実は何ものもなくなってしまう。その愛の極みは十字架である。だから、十字架は、一切の事態に對して黙って立っている。逆らう者には、いつかそれが本当にこの十字架を見て砕けるときを待



っている。

そのようなことで、本当に我々をして極限に立たしめるものは、この自由にされたるところの御霊の愛である。そして、それは本当の底力をもっている。私たちが、もし「十字架を負え」なんて言われたつて、負えはしない。けれども、キリストは、

「己が十字架を負つて、我に従え」

と言われた、その「十字架を負え」ということは、私たちはこのイエス・キリストの十字架の愛をいただいてこそ、聖霊の本当の愛の力をいただいてこそ、私たちの十字架を負い得るわけです。そうでなかったら、行き詰まります。

●信愛一如

そこで、キリストとの縦の関係において、信がある。その信が決して縦で終わらない。縦で終わっている信は本当の信ではない。必ずこれが横(愛)に展開していく。だから、これは信愛一如であるわけです。

信の世界においては、ある意味においては、個ですよ。神さまとの絶対関係です。けれども、もし個で終わるような信仰であつたら、それは本当の信ではまだない。その信が必ず愛に展開する。愛ならざるを得ない。この信をキリストは信とも仰らないで、

「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、主たる汝の神を愛すべし。己の

如く汝の隣を愛すべし。これが預言者と律法だ」

と言われる。神を受けとるということは、同時に神を愛することである。ここに信愛一如がある。そういう意味において、信と言おうが、愛と言おうが――それはある角度からは、あるときには信と言わなければなりません。また、あるときは、本当に愛と言わなければならぬけれども――そこは決して分裂したような二次的なものではないということです。

真理の世界は渾然たる一体ですよ。だから、愛のすがたは何かというと、私は円の中に十字架を書くよりかしやうがない。これが本当の愛と生命の世界です。円現している。一切を包括してしまう。その愛は、ただ「清濁合わせのむ」なんてのではない。ここに何か濁があれば、必ずこれを清の世界に変えてしまう。この中に取り入れられると、みんな変質されていく。この愛というのは、変質させていくところの、霊的な変化を起こさせるところの実力を持っている。

キリストの愛にでつくわすと、私たちが新たに生まれるということとは、変質させられるということです。生まれつきの人間はみんなそれぞれの性格をもっています。けれども、その性格に本質がくる。パウロというのは頑ななやつなんだ。けれども、パウロという頑ななやつが、キリストの愛の中に入ってしまったら、その強い我がが、キリストの福音のための強さに変わってしまった。同じ強さがあるんだけど、それが変わってしまった。みんな、私たちの人間の性質なんていうものは、「性格は決して変わらない」というが、



なかなか直りはしませんよ。」「三つ子の魂百までも」という。決して変わらないけれども、それが変わるんです。変わるといことは、その質をもちながら、その生まれつきの質を素材として、天的な質に変わるんです。意志的な人は、その意志が本当に神の御意として動いていく。情的な人は、本当にその情はまた神の愛として、キリストの愛として動いていく。知的な人は、その知識が本当に天的な知恵として展開が始まる。みんな私されたものはみんな神のものとして、今度は浄化されて動いていく。だから、それぞれの器がみんな、それぞれの天品を表していく。造花ではなくて、日の光を受けた生きた花になる。

●聖霊の果

だから、御霊の果は、聖霊の果は第一に愛であると22節に書いてある

然れど御霊の果は愛・喜^{よろこび}悦・平和

パウロはここで自然に動いてきた並び方がある。なにもパウロは考えてやしない。自然に動いてきたこの並び方が、「愛であり、喜びであり、和である」というこの三つの言葉が非常に大事な言葉です。御霊の果は愛である。パウロがコリント前書13章で言っているあの「愛は……」というのが聖霊の愛でなくて、どうしてパウロがあんなことを言えるでしようか。曠愛新書の第1号(『福音の心臓』)に私はどうしてもあれを書かなければならなかったのは、その意味なんです。もうこれはアルファでオメガだから。

愛であり、そして本当に喜びの音信です。私たちは、キリストはイザヤ書53章みたいな悲しみの人と言う。けれども、それは悩み苦しみを荷なっている意味において悲しみの人だけれども、それ以上の喜びが私たちの中にある。クリスチャンほど本当に深刻な涙を持つものはない。しかし、クリスチャンほど本当に明るいところの喜びを持つものはない。これはキリストの十字架を十字架とし、キリストの勝利の復活の生命を生命とするからです。

そして、本当に平和をもたらしめ、平和ならしむるものは即ち神の子である。平和と言ったって、ただいわるみんなが普通言っている平和ではありません。本当の和という、大和^{やまと}という言葉は、私たちは本当に福音的に自覚すべきです。

「我々は^{たいわ}大和をもつて世界に大和をもたらず国民である」というならば、絶対にこの聖霊を受けなくてはダメです。

日本中に、なんとクリスチャンというのは少ない存在であろう。けれども、あなた方は新興宗教が何百万人いようがびくともしない一人ひとりでなければダメですよ。そんなものでどうのこうのなんていうのではない。なんとなれば、私たちに宿り給うところのキリストのこの御霊の生命は本当の原^{はら}始^{はじ}力^{りき}である。「ウル・クラフト」、原始の力ですから。始めにして終末の力です。この私たちの中に宿り給うところの御霊の生命は、いわゆる原子爆弾が爆発しようが、絶対に消えるようなものではありません。

それだけのイエスの生命をいただかないで、信仰のなんのと言うのはバカげた話ですよ。



どうぞ、皆さん、皆さんの信仰は、もうそんな、何と言いますかね、くすぶったようなのは止めましょうね。これだけの人数で、四十七士ではないけれども、本当に大丈夫ですよ。大丈夫と言ったって、それでもう何もしなくていいという意味ではないけれども。どうか、「この生命を如何せん」と言つて、

「どうか、神さま、行き詰まっている人に会わせてください。どうぞ、これを何とかして伝えたいんです」

という祈りをもつて歩いていてください。神さまはいつかぶつからしてくださいから。

こないだ、小諸の帰りの電車の中で、私は腰掛けていたら、清里から乗ってきた男の子と女の子がしゃべっている。なかなか魂のおもしろいやつだと私は思ったから、途中から会話に入った。私が禅宗の本を読んでいたら、

「あつちのおじさんは何か禅宗の無のこと読んでいるよ」

なんて言っていた。こっちは仏教だと思つたらしい。それから、なんとかかんとか私は話しかけているうちに、新宿に着く少し前には、向こうはおつたまげてしまった。福音の話で最高潮にきてしまったからね。それで、こないだの「羔の婚姻」の講演会に二人ともやつて来たよ。これは立教の生徒だけれども、今度は何を言いに来たかと思つたら、

「立教で一年に一回、宗派を超越した会合があるから、そこで先生、話してくれ」

なんてなことになってしまった。また、その話がなにかのきっかけになって、救われる人が二、三人でもできることを私は祈っておりますけれども。

機^{おり}というものは、皆さんがそういう、

「この生命を何とかして伝えたい」

とやっているうちに、神さまが力を与えては、ポツとなざるから。それが本当の伝道なんです。そのようにして、じりじりと増やしていく。いい加減なクリスチャンが百人いようが、二百人いようが、ダメですよ。どんな嵐が来ても、消えない燈火^{ともしび}を持つていなければ。

「なかなか、私はそんな消えないようになりませんが」

なんてことはありませんよ。キリストのものは消えはしませんですよ。皆さん、心配はいらん。どうか、この消えない燈火になつてください。

「汝らは世の光なり」

とは、

「私はお前の中で光となるぞ」

ということなんです。もつと聖書を大胆に読んでください。

「汝らは世の光なり」

「ああ、なかなか私は光れないんです」

なんて(笑)。それは光りませんよ。そんなことしたら、それはまた律法の義になってしまう。

……
(録音切れ)

